

巻頭言 ー 希望は小箱の中に残っているのか

Preface: Is there any hope in the box?

植物と人々の博物館づくりもやっと軌道に乗り始めて、展示が充実してきました。初夏には一般公開することになりました。雑穀を中心とした山村の暮らしを常設展示することはもちろんですが、2008年の調査成果としては「小菅の養蚕」、「小菅の名人」、および「身近なインドの生活文化」を課題とした特別展示をします。このための一般公開解説書を発行し、参観者に配布します。雑穀展報告書に続く2番目の冊子です。『ELF環境学習過程』もモジュール教材を加えた改定版を発行しました。2009年から3年計画で開講する三菱UFJ環境財団寄附講義「多彩なアプローチによる環境学習」および自然文化誌研究会の環境学習中堅指導者研修会（のびとCONE+）で、基本テキストとして活用します。長らく地道に蓄積してきた成果がこのように目に見える形になるのはとてもうれしいことです。『民族植物学ノオト』もやっと第3号にたどり着きました。すぐには良い雑誌にはなりませんが、何事も地道に継続することが学問の道ですから、倦まず、弛まず前に進んでいきたいと思えます。

さて、特別展示課題「身近なインドの生活文化」は2008年の東京学芸大学大学院環境教育コースで担当している3つの講義の共通課題として準備しました。このために都内の社寺仏閣に日本まで渡っておいでのヒンドウの諸神を訪ねました。葛飾区柴又の帝釈天は、何本も見た映画「ふうてんの寅さん」シリーズで有名ですが、やっと訪ねる機会を得ました。新宿区神楽坂の七福神めぐりでは、大黒天、弁財天、毘沙門天の3柱の他に閻魔様にお会いできました。三鷹市深大寺のオビズル尊者には毎正月の初もうででお目にかかります。奈良の興福寺の阿修羅にお会いしたいと念じていましたら、近

く東京の博物館にお越しくくださるとのことで、駅ごとに大きなポスターが貼ってあります。

トランスパーソナル・エコロジーの立場に近いR.エイトキンは菩薩の心がこの世を救うと言っています。インド独立の父、マハトマ・ガンジーは人生の目的は自己実現であると言っています。この世の今を生きていて還暦を迎えてさえ、諦念と執念の間を揺れ動き、世間の役にも立てず、自己実現もままならずにいます。このフィールド調査の過程で諸神像に向かい信仰や信念を考えるに、菩薩になって慈愛することもできず、阿修羅にならなって戦い続けることもできず、所詮、凡夫にすぎないことに臍を噛む思いがしました。30年前に、多摩川源流を踏査した瓜生卓造は山村の現況を憂慮しつつ、希望を見出そうとしました。何時からでしょうか、日本文化の源郷の自然と文化が疎かにされるようになったのは、マイノリティの中には素晴らしい過去の伝統と未来への創造の芽がいつも変わらずに宿っていると思えます。しかし、現日本人はマジョリティに加わることにのみ汲々として、自分に対してすら責任を取らずにその日暮しをしています。パンドラの小箱には希望しか残らなかったのですが、本当に残っているのでしょうか。残っているのなら希望はカミの御慈悲なののでしょうか。

木俣美樹男(Mikio KIMATA)